

向きの生き方を奉ずる人々と、正面から張り合う覚悟がなくてはいけぬものだ。さて、1970年代以降、日本の産業は輸出発信の自律型へと移行し、「せっかく優秀な日本製品が世界中で歓迎されている」のに、日本人の対外的発言が旧態依然で、発信不全症の現状に、著者は慨嘆する。「メイド・イン・ジャパンの商標が、それだけで世界最高の品質証明と見なされる時代になっても、まだ日本人は、まるで無毒な弱い虫が、強力な毒をもった強い虫に、色彩や体つきを似せる擬態よろしく、欧米風に自分を装わなければ世界に出て行けない、自己否定的な心の弱さを捨てきれないのは困ったことです」(p.184)。

端的に言って、日本の自律と自己主張を説く著者は、そのことによって、他律としての、「心の弱」い日本文化を否定し、欧米追従とは別な次元での脱日入米を勧めていることになる。日本の自己主張を説くことが、かえって「擬態」を旨としてきた日本文明の否定に繋がり、また、自ら拒絶したはずの、他者折伏型に張り合う、強者への変身の勧めとも短絡する。さらにその根拠が問題だ。「これまで戦後の日本人が、外に対して積極的に発信することをしてこなかった理由の大きなものが、わたしは日本人の自分の文化文明に対する自信のなさ、(中略)、うしろめたさのような感情にあると考えています」(p.167)。著者の推奨する日本式英語を支える思想は、結局のところ、「自信」といった精神論や感情論に帰着してしまう。

ほぼ同時に刊行された『日本語の復権』で加賀井秀一も分析するように、日本語のテニヲハという辞は、外来の詞を無限に取り込む能力を発揮したという。この辞一詞構造こそ、言語の水準で、鈴木孝夫のいう「部品交換文明」を実現し、外来詞や訳語による「疑似西歐化」や「自己植民地化」を「擬態」してみせた、巧妙な「鑄型」ではなかったか。日本式英語推奨や、日本語復権も結構だが、その両者に交差する矛盾を突き詰め、「思考停止」の誘惑に抗する必要もあろう。

『日本人はなぜ英語ができないか』

言語ナショナリズムの陥穽に抗して

稲賀繁美
国際日本文化研究センター研究員・
総合研究大学院大学助教

何年かまえのことだ。大学の比較文化論で、対外的知的戦闘能力の必要を学生に説き、武器としての英語、という考えを説明したことがある。するとひとりの学生がレポートにこう書いてよこした。高校で武装は悪だと習った。日本は憲法によって武装放棄した。だから、自分は武器として英語を身につけるのはよくないと思う。これには意表を突かれた。国際的戦闘能力を放棄した以上、日本人には、英語を苦手とする権利＝義務がある、というわけか。あるいは、英語が得意になってしまっただけは、もはや「日本人」失格なのだろうか。

鈴木孝夫氏の『日本人はなぜ英語ができないか』を読んで、あの当惑を思い出した。『武器としてのことば』の著者は、本書でも、実践的かつ発信型の英語教育への転換を説いて止まない。国際語としての英語普及といった標語が、かえって大学での英語教育に、虚学としての延命のための口実を与えている、といった現状分析。英語の受講は選択制にして実力認定せよ。教材には日本事情を中心とし、日本のことをきちんと英語で説明できる、発信訓練に重きをおくべきだ。受け身の「国際理解」までも英語の授業に負わせるのは、結局英語教育の脆弱化を招くので、もつてのほか、といった主張。これには、大学教育改革に携わった者として、共感する部分も多い。実際、「実用英語」がこの国で掛け声倒れとなるのは当然だ。日本に生活する大多数の人々にとって、英語など、実用どころか、まったくの無用の飾り、という現実が支配しているのだから。とはいえ本書の根底には、著者固有のイデオロギー以前に、純粋に論理的に言って、メビウスの輪をなす「ねじれ」構造がとぐろを巻いているようだ。著者によれば、太古このかた、日本列島は、もっぱら外からの知識や技術の移入で成り立つ、受信・受容型で他律型の文明を形成してきた。これに対して、「今やかましく言われている国際化とは、そうした日本人の伝統的、内向的な生き方とはあまりに肌のあわない」ものであり、それは「本質的には異質の他者の存在を認めない折伏伝導型の、きわめて社会性の強い、外